

2019. 10. 16 (水)

「私にとっての Mastery for Service」への応答

三 浦 耕吉郎

私と Mastery for Service

私は人権問題、差別問題という講義を担当しつつ、研究もそういったテーマの研究をしています。それから、NPO 的な活動として、伊丹の人権啓発協会という所で、13 年ぐらい一緒に活動をしています。そういう私にとっても、今日の題は大変難しいです。どうして難しいかという、Mastery for Service という、その教えという考え方に対して、これはスクールモットーだけれども自分のモットーでもあるというふうに思えたり、自分自身にとって、それがとても身近な考え方であるという場合には、こういう場で話すことは容易でしょう。しかし、私の場合はちょっと最初に告白することになります。が、じつは、私にとっては、とても敷居の高い考え方に見えてしまうのです。今日は、この場を借りて、その理由を何とかほぐせればよいなと思っています。

それで、まず、どこが敷居が高いかという、Mastery for Service という言葉自体が、ちょっと 1 回聞いただけでは、英語でも分からないし、日本語に訳すと、「奉仕への練達」という、そういうふうな訳になるようです。サービスといい、奉仕といい、結局奉仕する人というのが、英語でいうと

「Servant」であり、そして、それはやはり神の下僕という、そういう意味が深くここにはあるのです。また、この「奉仕に練達」という、奉仕に練達した人というのは、この「Mastery」という言葉が示しているように、自分自身が奉仕に向けて自分自身を統御し支配できるような、そういうふうな人というのが、ここではイメージされているのです。それで、最初に、僕には下僕という感覚が分からないのです。そうですよね、信仰がないからなのかもしれないけれども、下僕というふうな、そういう感覚があんまりリアルではないです。それから「奉仕に練達した人」という、これはやはり強い人ですよね。自分の欲望を統御できたりするわけですから。そうすると、そのような人に僕はなれないという、そういう想いが若い頃には「もしかすると成れる」と思っていたかもしれないけれども、だんだん人生を歩んでくると、「僕には、そういう人にはとうてい成れない」というのが分かってくるわけです。そういう自分と今、私は晩年を付き合っているわけです。そんな私から見て、やはり敷居の高さというのがあるのです。それに関連して、「実はこういうことがありました」ということで、私の NPO の活動について触れさせていただきたいと思います。

伊丹市の人権フェスティバルから

数日前に、私が所属している NPO を中心にして、伊丹市で人権フェスティバルというのを開催しました。それは基本的には部落問題を中心にしながら、人権全般についてみんなで考えたり、フィールドワークをしたり、討論したりしようという、そういう試みで、なかには講演会などもあります。ですが、その人権フェスティバルが、今月 12 日・13 日の予定だったのですね。ご存じのように、12 日は午前中から台風 19 号による警報が出て、それはもちろん 12 日以前にもある程度わかっていました。木曜日ですが、10 日あたりには、「警報が出たらやめます」というような、そういうふうな決定はすでに出ていました。僕は、じつはその人権フェスティバルの実行委員長というのをしていたのですね。そうすると、開催するかしないかとか、そういうことはやはりものすごく重い問題で、実行委員長としても、木曜日・金曜日は 1 限から 5 限まで授業があるから、伊丹には行けないけれども、結構ある程度頻繁にメールでやりとりをしていました。僕は最後に、「そういうふうにするのは、それでいいと思うのですが。皆さんにそのことを、ここに参加するような人たちに伝えるような行動をよろしくお願いしますね」と係の人に言いました。そしてそのまま、僕は 12 日の午前中は、「今日は（人権フェスティバルは）開催しない」というのが分かっていたから、行かずに自分の仕事をやっていました。しかし、その 12 日の午前中には、何しろこの人権フェスティバルを行うというような、そういう広報をずっとしてきたわけで、それが突然なくなるわけですから、昼前から

始まるので間違ってくる人もいます。そういうふう間違ってくる人のために、暴風が強まる中でずっと待機していた人までいたという話を後で聞きました。それからその他にも、近隣に「こういう場合は、フェスティバルは行いませんよ」というチラシを配布するという、そういうことも担当の人たちは一軒一軒やっていました。「おかしいな、電話の連絡網がないのかな」と僕は後から思ったのですが、それもなかったために、そういうふうに一人一人が手分けをしてチラシを配って、「人権フェスティバルはやりません」というような広報ををやってきていました。後になってから、僕はその人たちから、「人権フェスティバルを行うのももちろん大変だけれども、やらないときのほうがよほど大変だった」という話を聞きました。僕は何しろ実行委員長ですから、その場にいなかったということ、これは奉仕への練達という点で言えば、駄目でしょうと本当に思ってしまうわけです。

それとあと、うちのこの NPO という性格を考えてみたときに、そこで活動している人たちも、「奉仕への練達」とか言っても、あんまりピンとこないと思うのです。なぜかという、みんな部落差別をなくすために、ある意味で自分たちのために活動している所であって、そういう意味では当事者的な運動をやっている人たちが多いので、そういう人たちにとっては、これは「奉仕への練達」という言葉で表現すると、かなりずれてくるのですよね。そういうこともあって、僕にとって、この言葉はちょっと敷居が高かったというわけです。

ベーツ先生の Mastery for Service

敷居は高いけれども、打樋さんからこういうお題をもらったら、Mastery for Service について一応勉強しないと駄目ではないですか。それでベーツ先生の書かれた、1915年（大正4年）に講演された、後の院長ですよ、そのベーツ先生の書かれたもの（「OUR COLLEGE MOTTO "MASTERY FOR SERVICE"」〔商光 創刊号〕）を読みました。これは、ネットでも簡単に読むことができます。そして、読んでみたときに、僕は意外な発見もあり、これまでの僕のイメージと違うなというところがいくつかあったので、最後にそこを強調してお話したいと思います。

それでベーツ先生が、Mastery for Service ということについて話をしているときに、具体的な例として何が上げられているかといったら、「どのような人が、こういう奉仕への練達というのを遂げなくてはならないか」というような、そういうところを話をされているところで、イギリスなら国務大臣のような、minister of state のような、そういう人たちにとって、まさにこの「奉仕への練達」というのが重要なのだということを言っています。そして、僕がさらに驚いたのは、そのときのベーツ先生というのは38歳で、とても若いですよ。僕らが知っているベーツ先生は白髪になった写真が主に残っているのですが、そうではなくて38歳の先生が、そして、いまの高等部というのではなく、旧制高校的な高校生だったのかと思うのですが、その人たちを前に講演をしているのです。結局どういう例を上げて彼らを鼓舞しているかといったら、事業家になって、そし

て、そこで成功した後、あなたたちは社会貢献をしなくてはいけないという、そういう話をしています。

つまり、僕がそこでなぜ「はっ」と思ったかということ、ちょっと別の話になります。今年度は2003年・2004年にさかのぼるのですが、社会学部とあとは総合政策学部で、聴覚障害の学生さんが授業でなかなか苦労していると、授業がよく聞こえないと、それで「何とかしてください」というような話が、同時にそれぞれの学部で持ち上がって、それで社会学部はノートテイク制度、それで総政もそういうのを作りましたけれども、ノートテイク制度というのを始めたのです。それでその制度を始めるときに、われわれとしては、ノートテイクといっても、先生が言ったことを全部筆記したり、あるいは後にパソコンテイクになって、短時間にたくさんの文字を打ち込まないといけないという、ものすごく技術が必要なものだから、これは有償でやりましょうということを学部では考えたのが、大学のどこからかというのは言いませんが、「関学はMastery for Serviceだから、無償ボランティアでやるのです」というので、「有償のノートテイクは認められません」というのが、最初の答えでした。そういうふうな経験があったために、僕はMastery for Serviceは無償ボランティアのことかと思っていたのに違うではないかと、実業家になって何千万円、何千億円と儲けたときに、そのお金の使い道をきちんとやりましょうという話だったから、それはやはり僕にとっては過去のMastery for Service についての間違った出会いと比べてみたときに、案外面白いなと思ったわけです。

つまり、単にNPOのようなボランタ

リーな団体において、そんな Mastery for Service というものが存在するというよりも、むしろ職業をそれぞれ持っている人たちが、その職業の立ち位置において実践するというのが Mastery for Service です。だから、いわゆるボランティアではありません。きちんと職業を持って、自分の職業の結果として Mastery for Service の社会奉仕をするという、そういう考え方ですね。これは何が重要かという、狭いボランティア、お金をもらったらボランティアではないという、そういう考え方が狭いボランティアだとし、そのようなものではなくて、もっとあらゆる所にボランティアな行為というのがあるよということ、むしろ気付かせてくれる、そして、Mastery for Service についてボランティア的なものという僕の思い込みを、ベーツ先生のエッセーを見て、新しい感覚を持つことができました。でも、だからとい

て、僕は実業家でもないし、Ministry でもないし、やっぱり Mastery for Service ということ、なかなか遠い所に見ながら、でも、一応理想としてそういうものがあるというのは、やはり大事なことなんだろうと思います。でも、ベーツさんは、「それを単に理想ではなくて、現実に実業家になったら、あなたたちは奉仕への練達ということが可能になるのだよ」ということを言っていたというところが、なかなかベーツさんの考え方としても、理想的、かつ、現実的な所を見ているというところがすごいなと思ったしです。

思ったよりも早く終わってしまいましたが、次の時間のために心をおちつけていただければと思います。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)